

施設

10m の津波の被害を受けた相馬海浜自然の家

相馬市

鈴木 修二 相馬海浜自然の家 次長

取材日 2011.5.13

幼児と親が一緒になり、砂浜等の自然の中で楽しく遊び、自然に親しむ環境教育を実践してきた。風光明媚な松川浦でのカヌー遊びを通して、美しい自然の保全の大切さを学ぶなど、小中学校等を受け入れ一般的な野外活動の他に自然観察や生態系・多様性に関する自然体験プログラムに取り組んできた。震災で建物が津波被害を受け、施設は閉鎖中。

3月11日 14時46分

当時は、相馬海浜自然の家の事務室にいた。職員7名が所内におり、自然の家に訪れていたお客様は、昼食を終えてバスで帰られた後だった。最近地震が多く、いつもの揺れなのかと思った。しかし、いつもの揺れとは明らかに違って規模が大きく、時間は長かった。職員は中に残る者、外に出る者とに分かれた。立っているのも困難な状況で、しゃがんで揺れがおさまるのを待った。その間に、地面に地割れができるのが見えた。

地震がおさまリ、中に入ると停電が起きていた。市の防災無線で3mの津波がくるという情報が入った。その後、防災無線が伝える津波予想は10mに変わった。もうお客様が帰った後だったので逃げるしかない判断した。職員全員が自家用車で、磯部地区で唯一の高台にある磯部小学校を目指した。3時過ぎに小学校へ到着し、津波の状況が確認できたのは3時半くらいだった。高台から少し下りた所で見えたのは、黒い塊のようなものが磯部地区を押し流している光景だった。地元住民の津波に対する意識は普段から高かったが、想定をはるかに超えるものだった。

磯部小学校は孤立状態になり、そこで一夜を過ごすことになった。11日深夜、市の職員が歩いて飲料水やおにぎりを運んできてくれた。

翌日昼前に水が引き、市が道路の瓦礫を撤去してくれたため避難所を出て福島市内にある自宅に戻ることができた。当時、電気は大丈夫だったが水の復旧には時間がかかった。スーパーも開けている店は少なかったが、なんとか食べることはできる状況だった。

振り返って

3月中は避難所の生活支援や利用予定であったお客様への連絡などに忙しかった。自然の家は、建物の一部は残ったが内部は全てが流された。現在も関係者以外は立ち入る事ができない状態である。今後の運営に関しては全く見通しが立っていない。



宮城県沖地震が近い将来起きる事は知っていたが、震災当日は津波を見て「福島原発は大丈夫だろうか」と思った。1,000年前にあった大津波に匹敵するといわれる災害を経験して思うことは、「人は、過去の出来事に対して常に謙虚に向き合っていかなければいけない」ということ。

相馬海浜自然の家の基本方針である「人と人とのつながりを大事にする」空気が、今回の大震災後に顕在化しているので、この空気が一過性のものに終わらないよう、行政、民間含めて大きな運動になってほしいと感じている。

自然の家は社会教育施設とされているものの、従来、社会教育そのものは曖昧でよくわからないと言われてきている。社会教育の根本は、人と人とのつながりこそが生きる力の源であり、人はその中でしか生きられないというところにあるのではないか。

今回の大きな被害を糧にして、社会教育を見つめ直してほしい。